

## 広域計画等フォローアップ委員会第1回小委員会 議事録

### (意見交換部分の抜粋)

日時：平成30年3月12日 10:00～12:00

場所：関西広域連合本部事務局大会議室

#### ■意見交換

○飯尾副座長

それでは議論に入りたいと思いますが、少し人数を絞っていますのは、じっくり議論をしたいとのことですので、できれば言い放しではなく、ご意見が出たことについて、自分はこう思うとか、もっとうこういうことがあるとか含めてご議論いただきたいと思います。それでは、どなたかいかがでしょうか。

○河田委員

首都圏への転出が非常に多いという数値なんですけど、実態はもっとですね。というのは、週末に東京発からのぞみで帰ってまいりますと、グリーン車も一杯で、本当、当日予約できない状況なんです。つまり、月曜日から金曜日まで東京で働いている人が一杯いるということです。ここの数字に載っているのは、住民登録の現象だけでしょう。どこ行ったかって、だけどこちらに本拠を置いて向こうで実際に働いている人がいっぱいいるんですよ。しかも、能力のある人間が抜けていると。要するに東京の方で、マネジメントするのに必要な人材は、月曜日に東京へ行って金曜日に帰ってくるって、こういう実態を忘れてはいけないということですね。ですから、数字に表れていない転出の実態はもっとひどいと考えなければいけないということですよ。しかも優秀な人ほど出てしまっているという、それが大きいと思うんですね。それでどうしようもなかったら、大林組みたいに本社を東京にもって行くという、こういうことをやっているのですよね。ですから、そのところをきちっとフォローしておかないと、バーチャルになっちゃってるんで。そこをきちっと議論しないと単に数

字だけの問題じゃないということですよね。

○飯尾副座長

ありがとうございます。

それではいかがでしょう。今、河田委員の出されたことについて他に意見がある方があれば、それについて伺います。これまた事務局も含めて、少し実態を調べてという問題提起だと受け取りましたが。

○河田委員

災害もそうなんですけれども、こういう問題は深刻になってから立ち上げたって無理なんですよね。ですから災害対策基本法というのが60年前に出来たんですけども、これはね、災害が起こったら対策をやるという法律なんです。だから起こる前は何もできないという。ですから広島のと砂防ダムで77人亡くなったところって、今、砂防ダムを一杯造ってるんですよ。こんなものは放って置いたら50年くらいは雨降ったって、滑るもん残ってませんので、起こらないんですね。やっぱり災害対策というのは、災害が起こったら二度と繰り返さないっていう、そういう立場でやってるんですね。後追いのなんです。ですから、環流の問題も、こんなもの前から分かってた話でトレンドが当然あるので、最初の頃にやらないと深刻になってからじゃ無理だろうと。

私、先日、滋賀県の三日月知事と2時間ほどお話しさせていただいたんですね。個人的にですが。そのときに、例えばリニア新幹線出来たら東海道新幹線乗らなくなるじゃないですか。要するに東京行くのに皆リニア乗りますよね。そうするとJR東海は当然、東海道新幹線の特に新大阪と名古屋の間の本数は減らすことをやりますよね。だからそれをむしろ逆手にとって、滋賀県内に東海道新幹線の駅をもう2つぐらい作って、と言いますのも高速で移動できますので、そうすると滋賀県のいわゆる琵琶湖の東岸が非常に良好な実は都市用地になるんですよ。今は新快速で行きますから時間かかるんですが、新幹線で行くともう30分ぐらいでその地域に行くことができるんですよ。そういうことを見なして都市開発やらなきゃいけない。だから、リニアの

計画が、路線が決まった段階で、どういうふうにするかってこと同時にやらなきゃいけないのに、随分時系列的にやろうとするから後手後手になっちゃうんですね。ですから、三日月知事に要するにこれをチャンスと捉えて。かつて栗東の辺りに駅を作るといので、結局滋賀県の理由で無理になって、JR東海非常におもしろくない感想持っておられるんですけど、そんなものは前の知事がやったもので、やっぱりこれから滋賀県というのは非常に環境も良いですし。ご存じないと思うんですけど、戦後70年間で一番自然災害による死者数が少ないのが滋賀県なんですよ。もちろん活断層もありますから動けば大変なことなるんですが、少なくともこの70年間一番47都道府県で災害による死者が少ないのは滋賀県なんですよね。風光明媚だし、それでもってね、この名古屋、大阪に近いという、時間距離が近くなるということを生かしてね、リニアと同時にそういうことをやらなきゃいけない。全ての対策というのが時系列的にやろうとするので、そのタイミングがずれちゃって効果がないんですね。

これ東日本大震災で非常に復興が遅れている釜石がそうなんです。釜石の港っていうのは東北地方で一番静穏度が高い港なんですけど、同時に高速道路を造らなければいけなかったのに、港だけよくなったので新日鉄釜石はもうどうしようもないっていうことですよ。これは新日鉄釜石だけじゃなくって、実は久慈に当時の川崎製鉄が大きな実は製造工場を持っていたんですが、やっぱりこれも船しか駄目だっていう、総合開発になってないんですね。しかも、港を開発するのは運輸省、道路は当時建設省、バラバラなんです。ですから関西の環流のことやろうとすると、いろんなファクターを同時的に見ないと、時系列に見ると絶対そこで時間差で、空白のところ出てきますのでね。ですから、そういう網羅できるような体制で委員会を動かさないと。一つひとつここに何かいろいろ書いてあるんですけど、こんなん一個ずつやってどうしようもないですよ。だからどうつながっていくのかっていう、いわゆる空間的なつながりともう一つは時間的なつながりっていうか、こういうものを前面に出していかないと。自分が専門とするところでそこをつついたって、そんなものは単に

一つの例であってつながらないっていうか、だからやっぱり連携とか調整をこうやっていかないといけないんだと思いますが。

○飯尾副座長

ありがとうございます。総合的にタイミングも考えてというふうなご意見だと思いますが、いかがでしょうか。最初ですので、関連することでもよいですし、あるいは論点を加えていただいてもと思いますが。

○北村委員

今の河田先生の最初の論点ですけど、東京の一極集中は、住民の移動を規定する雇用の問題等を含めて多面的に見る必要があると思います。そうであれば、現段階における関西から見た東京への一極集中は、どういう局面にあるのかということの少し検討することが必要でしょう。戦後ある時期までは、大阪圏に人が集まった時代もありましたが、東京一極集中に移行し、その基礎には金融から製造業含めて関西系の大企業の本社機能が東京に移行する流れがあります。現時点における東京への人とモノとお金と情報の関西から東京へ流れが、どういう局面にあるかについて少し事務局の方で少し分析をしていただき、それを踏まえて関西として現在どのような手を打てるのかということを検討する必要があるのではないかなって思っております。1970年以降は、東京一極集中が進んできているわけで、70年代半ばは人口で見ますと、若干その傾向が緩む年もあって、80年代辺りから本格的に一極集中が始まるってというのは、地域人口動態見た場合の基本的認識です。現在ではそうした地域人口移動の流れとその要因は随分違ってきますから、そこがどういう状況にあるのか少し調査いただければありがたいし、またその点についてご意見がこの場であれば、お伺いしたいと思っております。

○飯尾副座長

ありがとうございます。事務局の宿題について、ヒントとして、現段階で北村先生が気が付いておられる、こんなところちょっと見ないといけないんじゃないかという

ところ、北村先生何かおありですか。

○北村委員

やっぱり日本の場合には、グローバル機能が東京に一極集中をされていて、それが近年の東京一極集中の大きな一つの理由ではないかということはあると思うんですよね。それからもう一つ、IT化の問題ですが、本来はアメリカなどを見ますともう少し地域分散型になり得る可能性を持っているのですが、日本の場合には必ずしもそうならず東京一極集中的傾向を持っているITベンチャーなどはむしろ東京に集中しているというような状況があります。アメリカやヨーロッパのようにITベンチャーが首都一極集中でなくて地方でも広く生まれてくるには、どういう仕組みが必要か、日本はどこが問題なのかってことを少し分析する必要があると思います。そういったことが今日やっぱり効いているんじゃないかと思えますけどね。

○飯尾副座長

ありがとうございます。木村先生お待ちですけど、しかし他の方でこれに関連するご意見、これを加えたいって方はおありですか。

それでは、先ほどから事務局に宿題が出ていますので、ちょっと資料なんかを作って、次の議論ができるように考えていただければと思います。それでは木村先生お待たせしました。

○木村委員

私は3つぐらい申し上げたいと思います。かなりの議論これまでもされてきてると思いますので、前回の話し合いも含めたうえでの意見になります。

まず第1点です。関西から人口の流出とか、そういったことはかねてから関西広域連合が作られる前から言われていることですが、それについてはかなりの努力をしてきたけれども、現在こういった状況にあるというのが現実だと思います。

私は関西に人が来てくれる、また帰ったところで関西の良さを広めてくれて、また別の人に来てくれるという点で、どうしても注目したいのは外国人です。外国人の

宿泊客で大阪は東京に次いで多くの人に来てますし、京都まで入れると本当に多くの人に来てくれていると思います。もっとこれから増えると思うのですが、なぜそれほど大阪が人を惹きつけているのか。一つはソフトのパワーだと思います。USJも初期は不振でしたけども、ソフトの面白さであれほど人が来てくれるようになりましたし、大阪のまちづくりの博物館に行っても中国人と韓国人の若い人たちでごった返しています。この外国人のパワーをどう生かすのか。今のところ大阪とか京都が有名で、また和歌山県もかなり前から力を入れていて、特に世界遺産との関連で注目されていますが、関西で共に努力しながら、どのようにして外国人のパワーを生かし、取り入れていくのかと言うことですが、それは、外国人観光客だけじゃなく、例えば、特にアジアの優秀な人が関西で働いてもらう場合、関西は東京と比べて非常に働きやすい環境にあるというようなことを売りにするということが重要ではないかと思います。

第2点は、前回何人かの委員がおっしゃったことですが、関西各地でいろいろな面白いことをしているのだが、政策やプロジェクトとかお互いにどういうことをしてるのか知らないのではないかと、また新しいことをする場合に、そういった情報を得られれば良いのだが、なかなか得られないんじゃないかという意見がありました。そして、関西広域連合に来れば、そういった情報を得られるようであれば非常に良いのではないかという意見が出ました。関西広域連合を作るときの議論からすると、関西広域連合がそういう役割を果たすようになると、機能的に現在よりは変わるのかと思います。そういう情報の共有は、人の環流を図る上でも、関西以外の人に来てられるためという点でも重要なので、専門の部署を設けないとしても、プロジェクトマネージャーのような研究者でも、あるいは自治体の出向者でもいいのですが、全体を見ることができ、情報を持っている人を数人置くというだけでも、かなりのことができるのではないかと、ということです。

第3点は、私の個人的な体験で少し申し訳ないんですけども、東京の大学で都市再生とかいった授業を持っているのですが、東京の渋谷の再開発の話もしますし、大阪

の梅田の北の再開発の話もするのですが、梅田の北の再開発の話をすると東京の学生たちは、大阪でこんな面白いことをしているのですが、今度大阪に行ってみて見ます、といった反応が返ってきます。それから大阪、京都など関西で開催される国際会議の件数は、関東圏に比べても引けを取らないです。一つひとつの会議は大きくはないですが、関西圏全体で見ると大変な集客力を持っています。これで福岡県がしてきたように、特にアジアから人を呼んで国際会議を開くというような努力をプラスしていくと、もっともっと人が環流するようになるものになると思います。私が考えるのは、関東等関西以外の地域に出て行って出前授業みたいなものを、もっともっとしてもよいのではないか、ということです。テレビのキー局が関東に握られているとすれば、草の根のPRをしていってもいいんじゃないかということです。以上3点です。

○飯尾副座長

ありがとうございます。まとめて3点いただきましたが、これにフォローする意見があればまずどれかということだけでいただければ。

○松原委員

今日の人口流出に関する資料を見て、「ああ、和歌山が一番ひどいな」と思って、いつもがっかりするんです。

そんな中で和歌山県民は、木村先生がおっしゃったように観光に関心を持っています。

しかし、訪日旅行者に対する戦略的プロモーションの展開をするために具体的方法としてどのようなやり方があるのかと考えてしまいます。外国の方が自分の国にはない「日本的なもの」と感じるのとは何か、と考えます。

和歌山をはじめ関西圏に層の厚い文化資源が沢山あるということは事実ですが、旅行ガイドに載っているだけのものではないことをもっと知らせて、リピート率をあげる工夫が必要だと思います。つまり、知られていない文化資源の掘り起こしを広域連合で発掘して国内、海外に発進するというのはどうだろうかと思います。

このアイデアは、地域に残る伝統芸能を人口減少で絶えさせないで次の世代につなげていくという効果も期待しています。

それを皆ミックスした中で、例えば、この関西広域連合が把握する地域における祭りや伝統芸能のカレンダーをまず作ると。カレンダーを作って、それについて今度、例えばカメラとか趣味のある団体に対してここにあげられた祭りとか伝統芸能について、フォトコンテストじゃないですけど、コンテストをある一定の期間1年にわたってすると。そこで集まったものを表彰すると。優秀作品とかは問わずこの応募された写真については、そのカレンダーと一緒に行事に貼り付けていくことの許可を最初から取っておくと。そして視覚的に皆さんに発信できるっていうような状況をまず1年かけて作って、それでそれは日本だけじゃなくって海外からも見れるような環境にしておくと。この問合せ先はどこですよということも含めてちゃんとここに行くとしたらどうするのかと、あるいはその周辺ではどんなことがあるのかとか繋がるような形の何か具体性のある戦略的なプロモーションがかけられるような環境を関西広域連合で作っていただければいいんじゃないかなと。

○飯尾副座長

大変具体的な御提案をありがとうございます。

○松原委員

そうなんです。抽象論というより、具体的な話の方が、フォローアップ委員会のさらに小委員会にふさわしいのではないかと。弁護士なので解決を目指すという思考が優先してしまい申し訳ないです。計画や抽象的な提言はもうされている中なので。

それともう1つ。さっき大学を介しての人の環流っていう話で一つ思いついたことは、今、リカレント教育って盛んに言われていると思うんですが、それについても皆さんの地元の大学、関西広域連合に所属している地域にある大学が、どんなリカレント教育のメニューを持って、どういう人をターゲットにいろんな講座を設けているのかということ、関西広域連合の方で一つにまとめられたらどうかと思うんです。大

学は、これまで文科省直結で地方の自治体とは関係が希薄でしたが、法人化後、大学の地域貢献が強く唱えられていますので、協働できると思います。それで、その大学に行ってみましょうということは、その地域に対する愛着もそこに生まれてくるかもしれないので。あるいは、先ほどITが地域分散しないという話もございましたけども、そういうところも大学間で競争なさってリカレント教育と産学連携で地域と一緒に頑張って頑張れば、ある程度実現可能かもしれないなと思います。

○飯尾副座長

ありがとうございます。どちらかという先ほど木村委員のお話のあった情報共有という点で、観光とか大学というところでもう少しできるんじゃないかと具体的なご提案も出たと思いますがいかがでしょうか。

○河田委員

南海地震が起こったら、和歌山県、三重県に非常に大きな被害が出るのではないかとのことになっています。高速道路があと60kmでつながることになっていますが、暫定2車線なんです。本格で4車線にするとき、例えば2車線は尾鷲と田辺を山岳道路にする。なぜかという、熊野古道がすごく不便でアプローチが大変なんです。奈良県の道路が悪いということもあるが、せっかくの世界遺産を売り出さないといけないのにアプローチができない。仁坂知事、鈴木知事にも伝えているが2車線はトンネルを作って山岳道路にする。紀伊半島は、日本最大の半島ですが、そこの真ん中に行くのは大変。温泉巡りも大変なんです。次の温泉に行くのに3時間かかるんです。従来の高速道路のやり方に、公共事業のやり方に恒例するのではなく、2車線は別ルートをつくって、ぐるっとラウンドでいけるようにする。今までの高速道路では日本ではないんです。4車線は必ず同じところを走っている。2車線と2車線を分けることもしなきゃいけない。

それから、東京の観光客ですが、大阪では道頓堀に行くと中国人ばかりで日本人はいない。浅草に行くと半分ぐらいは日本人。つまり日本人にとっても魅力的なところ

になっているわけです。ですからインバウンドだけでなく、日本人にとっても魅力的な観光地になっていかなければならないということです。東京はエキサイティングシティになっている。いわゆる若者だけでなく、高齢者にも魅力的な都市になっている。このように変わっていかないと単に外国人観光客だけではなく、魅力的な都市にならなければならない。修学旅行は神社仏閣だけではなく、大阪や神戸の近代的なものを見にければ良い。あいかわらずで社会構造を変えていかないと、環流というのはフローのところをそれだけ触っても動かない。京都・奈良に集中する修学旅行生を関西全体へ広げないと。そのためには何が魅力かを皆で考えないといけない。今までのものをそのまま置いて新しい枠を付け足す考え方はお金のない時代に無理がある。従来の枠にとらわれない新しい発想で考えないと繋がっていかないと思うんですが。

○飯尾副座長

インフラにしても観光にしても枠を越えた新しい発想が必要ということだと思えます。木村委員、どうぞ。

○木村委員

河田先生のおっしゃるとおりだと思います。今、交通機関の整備についても防災や環境など多面的に考えられてますけれども、意外と少ないが観光の面だと思います。

最近、イスラエルが新しく開発した巡礼コースというのがあって、それは若者たちが地域振興のために考えたということですが、イエス様の生まれたナザレから生涯の大きな活動をされたカペナウムまでを4日間で歩くコースを開発して、見せ場見せ場にいい眺めとか作ってあって、それから昔の古道を歩くとか、今の道を歩くとかします。1日の行程ごとに、田舎の宿で泊まれる場所を確保しています。そのコースはいろいろな道と交差しています。関西は、熊野古道みたいな世界に冠たる巡礼道があるのですから、海外から人が来た場合、3日だったらこのコースで行ける、2日だったらこのコースでいけるよということは意外とやっていないかもしれないですよ。それを交通体系と結び付けあわせれば、もっと魅力的な観光資源になると思います。

河田先生が浅草のこともおっしゃっていましたが、日本人にとっても魅力的なものというのはまさにそのとおりだと思います。ただ、統計を調べてみると日本人の宿泊客は東北大震災以降、十数パーセントしか伸びていないんです。2011年で外国人の宿泊客は日本人の総宿泊客の20分の1くらいだったのですが、2016年では6分の1まで伸びてきています。これからの伸びしろをみると外国人観光客に熱い視線というのは欠かせないということです。

○飯尾副座長

まあ、双方が大切であろうということかと思いますが。

○河田委員

2年前に熊本の地震が起こったあと、蒲島知事が熊本復旧復興有識者会議を設けられて、五百旗頭先生、御厨先生に僕も入れられて、やったんだけど、今、どういふことをしているかと言うと、熊本空港を中心にヘリコプターで桜島、雲仙普賢岳、阿蘇、こんな近場に活火山があるのは日本だけなんですよ、ですから、そこをヘリコプターで観光すると。湯布院とか温泉もありますから、ヘリポート作って。要するに、世界の裕福な人が列車に乗ってゆっくり回るなんてものではなくて、短期間で良いからレベルの高い観光ができるような、そういうことをやろうと。ないんですよ、だから熊本県は観光開発はそういう形でヘリコプターを使って、東南アジアが近いですから。九州というと福岡が中心だと思っているんですが、地形的には真ん中が熊本なんですよ。だからその利を活かして、世界の富裕層相手の観光開発をやろうと。ですから数ではなくて、短期間にそういう人たちにとってとても魅力的な観光サービスを提供できるという売りなんです。これは実は他にないんですよ。それを熊本県はやりますしね。だってクルーズ船が入ってきても食事は自分の船で済ませて、周りのレストランでは食べないですよ。お金が落ちない。クイーンエリザベスのような大きな船が来てもお金を落としてくれないんですよ。だから、むしろ、お金持ちが来て、短期間だけでもエンジョイしていただけるサービスを、日本だからできるという、こ

ういうものやっつけていかなければならない。関西もオンリーワンというか、ここでしかできない観光サービスを提供しないといけないんで、東京とか他のところを意識せずに、ここへ来たらこんなことができるという、そういう売りがやはり必要ではないか。

○飯尾副座長

ありがとうございます。観光の幅のことも問題かと思いますが。いかがですか。

○北村委員

河田先生の関西のオンリーワンというところに少し絡めた話をしたいと思います。先ほど、90年代以降のグローバル化がなぜ東京一極集中をもたらしたかという問題に関連するのですが、世界都市論の議論などを見ていると、世界都市にはヒエラルキーがあって、例えば80年代であれば、ロンドン、東京、ニューヨークがトップであとはざっと並んできますから、大阪も相対的に地位は低下しましたし、アメリカで言いますとシカゴがかつてに比べれば、地位が低下しているのです。グローバルシティというのはそういう性格を持ってきているので、その流れで言えば、いまさら関西に金融のグローバルな中心は無理なわけですね。とすると、例えばアジアのハブ機能を担う関西というけれど、どういう機能を持てば、ハブとなるのかという、そこを考えないと、東京と競争してもしょうがない。だから、おそらくオンリーワンという機能は、アジアのハブ機能という問題でもありうるので、そういうところを考えながら、人の環流とかを考えなければいけないのではないかと思います。

あと、先ほど修学旅行の件が出ましたけれども、今や、京都、奈良もありますけれども、修学旅行の一つの流れは小中学校の生徒たちにいわゆる現地現場体験をさせる、農家民泊とか島に行って漁をしてみるとか、自然体験現場体験型の修学旅行が急速に伸びていまして、滋賀県などはその受け皿になっています。その意味では今がチャンスで、かつてのような都市型中心の修学旅行ではなくて、自然体験を踏まえた教育旅行が急速に伸びている。私が付き合いのある滋賀県の米原の大野木というところは、

横須賀の中学と毎年提携して、5～6年間交流しながら教育旅行を受け入れています。首都圏のある中学と滋賀県の集落が提携しながら、毎年生徒を受け入れている。おそらくそれが今後も続いていくと、Iターンの受け皿になる、そういう動きはいくつかあるので、そこは重視する必要があるのではないかと思うんですね。

一昨年から、関西広域連合で若者の意見を聞こうという企画を夏休みにやって、各大学で関西の発展をどうするかというのを若者がレポートし交流しています。1回目に関西圏における人の環流の問題で、私の学部のゼミの学生も応募したのですけれども、その時に彼らが考えたのは交流した自分たちにもメリットがあるし、その地域にとっても何らかのメリットがあると考えたら、彼らにとっても一種の体験学習型の観光というのが大変面白いというのです。それをざっと関西で見ると、和歌山が県のホームページに全部の一覧が載っているのですが、他の県はそうじゃない。そうすると関西全体で体験ツアーみたいなものをまとめて、そこから各県に飛んでもいいのですが、そういう一覧のものがあると、意外と若者などはそれを見ながら、関西圏域をめぐり歩いて、いい発見をして、その後の人生に対して何らかのメリットがあるのではないかと報告したのを覚えております。その面では和歌山は先進県であると思います。

○飯尾副座長

ありがとうございます。色々な試みもあるということだと思いますが。さて、どうでしょうか。

○山口委員

今年からということで、そもそも人が環流するというモデルが必要ということはこの関西広域で言い始めた理由は一体なんだったのかということはずっと考えながらお聞きしていたのですが、本日の資料のこの転入の数字の資料を見ていると人口の減少とか東京への一極集中というのを関西としてゆゆしき事態であると、これを何とかしないといけないのではないかと言うことがもしベースにあるのであれば、観光の産

業化という話とこれが本当に結びつくかということ、自分なりに考えておかなければいけないとは思いました。昨年、ある研究者の方とお話をしている、グローバルでこれから伸びていく産業は唯一観光だけだということを断言されている方があったのですが、要は人口減少していく中で、先進国に発展途上国が進んでいくときに人口がそう増えない、そんなときに大量消費型の産業モデルは続かないと世界中の企業が気づきはじめている中で、では次の産業は何なのかという時に、その研究者の方が注目しているのは、過去の伸び率を考えると観光しかないというようなことをおっしゃってまして。で、そう思うと関西というのは、東京はたかだかしれている時代背景しかない中で、関西はかなりの長い時間の日本らしい魅力的なものかなり持っているのではないかと思うと、産業としての観光を取り込む可能性というのはかなり大きいとも思います。

東京になぜ一極集中しているのかという時に、一昔前、私が大学生の頃に、大学に進みたい時に、東京にしか知識や専門の学校がなかったのも、仕方なく東京に行った。けれども、私は関西、滋賀に帰ってきたかったのも戻ってきた。では、戻ってくる理由が、ないから帰ってこないのではないかというのが1つ。

もう一つはやはり経済です。働き口を求めて、東京へ行かざるを得ない。本社が東京にあるために、本社に配属されたら東京になったら行かざるを得ないということ。を思うと、経済的な発展なしに人口流出を止めることはないのかとなると、じゃあ観光を今後50年、100年という中で関西でどう産業化していくのかということ。は大きなテーマなのかと思うと、ここで観光の話が出てくるのはとってもよく分かると思います。が、実はそんなに長いスパンのことではなく、たちまち先ほど言っていたきましたが、和歌山からだいぶ出て行っているよねとか、いや、関西として、大阪に集中させたいのかとなると、周辺の府県から集めればよいわけ。滋賀からもどんどん大阪へ人を送ればいい。要は、こういう都市構造というのは人が入り続けないと成り立たない都市であり、ビジネスモデルなんですよ。それは東京を見ていたらとっても

よく分かるんですけれども。供給し続けられないといけないから、大阪を維持しようと思うと、人を周りから供給しつづけないといけないのではないかということになってしまいうんですけれども。本当にそのモデルが50年後、100年後、人を幸せにしていますかということ、ちょっと隅に置いておかないと、私は正直怖いなど実は思っています。で、おそらく、滋賀県の琵琶湖環境科学研究センターの内藤先生の意見聴取をしていただいたと思うんですけれども、内藤先生はおそらく、もっと長いスパンで、社会がどう変化をしていくべきかということをとらえるべきだと。それを発信できるのは関西しかないはずと言ってこられたと思うんですけれども、なぜ田舎がこれだけ世界中から注目をされ、なぜ、今、子供たちに自然体験をさせようという大人が増えているかというのは、何となく皆さんもお気づきではないかと思うんです。で、本当に人口を減らしたくなければ、子供たち、若者に愛着を持たせるしかないと思います。実際、私が帰った理由もそうでしたし、今、地元の高校生たちとも話していますけれども、高校生たちも東近江が大好きで、東近江にいたいと言います。けども出ていく子もあれば、残る子もあるでしょう。でも、出て行った子たちもまた帰ってくる、その愛着なしに田舎の人口減を止める術は私は正直ないと思います。で、それが今、本当に観光ですかというのは正直聞きたいところです。滋賀にもたくさん県外から子供たちが来ています。が、彼らが滋賀に住むことはありませんよね。だから教育的な意味で観光の位置づけと産業としての意味での位置づけと、何のためにやっているかということ整理しておかないと、どれが悪いと言っているわけではなくて、どれも必要なんですけれども、整理をしておかないと若干議論がかみ合わないのかもしれないなと思いつつ、聞いておりました。

○飯尾副座長

ありがとうございました。何のための環流かということかと思えます。いろいろな切り口はあろうかと思いますが。

○河田委員

観光というのは、今やリアリティのあるものだけではダメなんですよね。古い街とか自然環境に恵まれているとか、それだけではなくて、バーチャルなものをどう増やしていくかということ、バーチャルとリアリティの境界があいまいになっている。そこのところを考えておかないと、年に何回か来るという形の観光でリカバーするのとかという問題にも絡んでくるんですけれどもですね。例えば、リニア新幹線は86%はトンネルなんです。ということは、いくら早いと言っても、1時間トンネルの中にモグラみたいに走るのがいいのかというと、きっと、窓には外が見える時の風景がバーチャルに出てくる。そうしないと真っ暗の中で1時間、いくら効率がいいとは言っても全然面白くないじゃないですか。真っ暗なところを走るなんて魅力ないじゃないですか。そうすると窓に実は山の向こう側にこういう風景があるのだというものがバートと高速で出てきたら、とてもそれは魅力的ですよ。ですから、そういう時代になっているので、観光資源というものをもっと多角的に見ないと、いつまでも古い神社仏閣や環境のいい自然があるとか、そういうものだけではまずいのではないかと。実は、今、人と未来防災センターには年間50万人の来館者がいて、その6割が小中高生です。まあ、だいたい修学旅行ですよ。で、なぜ来るかということ午前中勉強して、午後はUSJですよ。USJだけだと遊びに行くのかとなるけれども、午前中学習して、賢くなって。というのは、やっぱり、入っていくときと出てくるときと違うんですよ、子供たちの表情が。だから、非常にインパクトがある施設になっているんで。ですから50万人も入ってくれているのですが。それとやっぱりUSJが高速で20分ですから午後はUSJへ行くと。そういう組み合わせというのは子どもたちにとっても、とても僕は魅力的だと思っているわけです。もちろん、人と防災未来センターでワークショップできたり、地元のハザードマップ見れたり、いろんなサービスをしているんですけどもね。ですから、多面的に観光というものを考えておかないと、従来の線上での観光資源というものを豊かにするというだけでは、なかなか環流にはならず断流になってしまうと思います。

○飯尾副座長

上村委員、いかがですか。

○上村委員

環流というところが私には正直、非常に分かりにくかった。環流ということと関西広域連合で何ができるのかということを考えるときに、人が環流するというご議論があった中で、観光でたくさん人が来たり、交流するということもあるでしょうし、数字に表れる定住人口の少なさ、これをどうしていくのか。移住計画というのも資料の中に出てくるんですけども、定住移住のことと交流ということとは分けて考えないと、問題の質が違うなど。違うことがないかもしれないけれども、それが絡んでくるので。先ほど山口委員がおっしゃったように、定住移住をするための大きな要素として、仕事があるかどうかということは大きなことです。仕事があるかという時に、観光というのは大きな産業の1つだとは思いますが、関西は観光だけではないというところで、仕事の魅力のあり方というのも考えないといけないと思っています。特に大企業の本社は東京に集中し、大学は数でいくとそうではないかもしれないけれども、例えばスーパーグローバル校に選ばれたとか、そういう比較、冒頭に河田先生のおっしゃったような質のところはどうなのか。あと質というと非常に失礼な言い方かもしれませんが、企業においても大学においても研究機関においても、あえて人の質という場合において、どうなんだといった時には、やはり少し見劣りしてしまうというところの、何となく中枢でない、なんか日本の中で自分たちが決定権を持って何か物事を動かすとか、最新情報が入らない、なおかつ、決定権がないというあたりに歯がゆさを感じながら、この関西広域連合ができてきたのだと思う。その中で、結果として、関西の定住人口を増やし、観光の交流人口を増やしていくためには、どんな方策があるんだろうかと思っています。その時に、最初は、関西広域連合も中央集権から独立して、道州制とか元々の趣旨にあると思うんですけども、中枢機関を分社するんだというくらいの勢いがあったと思うんですけども、そのトーンが変わっ

てきている。今は、企業で言えば、大きな支社のうちの一つになっているんだけど、昔は大阪の支社に来た人は必ず役員、トップになるとか、中枢に上っていくとか、そういうのがあったんですが、そのトーンすら下がってきているということもあって。例がいいのかわかりませんが、そういう現行の枠組みの中で、無視できない大きな存在を持ちながら、大きな負けない支社とするにはどうしたらよいのかということで、もう一度、関西広域連合は戦略を練り直すべきではと、私はここに来て思います。以前はいわゆる独立的なところでの戦略であったのを、大きな支社の戦略に切り替えていく時期だろうと思うんですね。

そこで、人の問題にもう一度戻りますが、シンガポールがやっているようなリーダー格や中枢キーパーソンを徹底的に張り込んでのインセンティブスカウトですね。関西の場合はどうしても政治に頼らないみたいなところを売りにしている政治家、議員、経済人も多いんですけども、今の日本の統治の枠組みの中でそれはあり得ないんで、むしろ、いかにどう、再分配されるかということが大事だと思う。地方へ行きますとその辺の構図がすっきりしている。市町村の政治家を挙げ、企業の商工会議所を挙げ、知事を挙げ、国会議員を挙げ、国からいかに補助金、交付金をたくさんとってくるかという一貫した流れというのを関西以外のところでは感じるんですが。関西は大阪の八百八橋は庶民の力でやったんだというところに戻って行ってしまっただけで、お上の力は頼らないとか、中央に何も頼らない精神論が多く、気概は大事ですが、そうではなくて、もう一度、一貫した、どういう風に関西に有利な政策というのを、上から下までどう持ってこれるかという戦略を考え直す時期にあり、その中で環流の問題も人の問題もあって、そして結果として交流人口、定住人口も増えたなということが数字になって出てくるのではと思います。

○飯尾副座長

ありがとうございました。何が魅力かという、相反するようなこともおっしゃったので、その辺のこともどう考えるのか、関西の多様性かと思いますが、もう少し、そ

れを議論していきたいと思います。

○新川委員

キャッチアップができていないところもあるかもしれませんが、何点かお話をさせていただきたいと思います。

一つは、広域行政の研究会をやっているものですから、それとの関係性を考えたいというのがあります。関西広域連合というところが、どういう範囲で人の問題、環流の問題、交流の問題を考えていくかという時に、焦点の一つがやはり関西広域連合の中で本当にこの圏域の人たちが相互に交流をしあって、その中で相乗効果、刺激をしあって様々な新しい生産やあるいは新しい発見や新しい文化というのを作っていくことができるのか。そういう姿をどのように考えていけるのか。一府県内、あるいは一市町村内に留まるのではないそういう視点がいるかなという風には思っていました。

それからこれも一般論ですが、こういう広域を考えていくときに関西広域連合の構成府県市は頑張っておられるとしても、実はすぐ隣接をする地域との関係が以外に深いということがあります。それは、三重、岐阜あるいは愛知、福井、それから岡山、こうしたところとの圏域の関わりが結構深くて通勤・通学も部分的には、ありますし、経済的にはこの圏域との繋がりが多くて商取引だとかあるいは電気通信の回線の使用だとかでいうとかなり広い範囲で関わりが広がっていく、このあたりの視点が必要なというのが大きな2つ目の論点です。

3つ目にそうは言いましても、オールジャパンの中で関西というのをどういう風に位置づけていくのかという視点が当然必要で、東京圏というのもありますし、実は北海道も東北もあるいは九州・沖縄も関西とずっと長い付き合いがありますし、大阪と東北というのは、東京を飛ばしてつながっている側面も結構あります。そういうところをこれからどんな風に位置づけてたり考えていったりするのかというのも戦略的には必要だなと思います。世界に行く前にまずはこうしたところから入っても良いかなと

言う風に思っています。

もちろん、世界との関係で言うと、実は関西圏というのは、特に大阪を中心にした地域は、ある意味では日本社会の中でも、多文化共生の先進地域ということができると思っています。こういう歴史・伝統、しかも戦後の混乱期以降の経験というのを積み重ねてきているこの関西の地域の国際性のようなところを、これをやっぱり見逃す手はないなという風に思っておりまして、ただ単にその経済的な軸と言うよりはむしろ社会・生活・文化のような国際的な軸というのが大事になってくるかなという風にちょっと広域的な観点から気になっている点がありました。

それから、大きな2つめとして、ぜひ考えていただきたいのは、前回、飯尾先生がNPOとか市民の活動について触れておられました。改めて大事だなと思ったのは、実はもちろんいわゆるNPO法人の数は東京圏が圧倒的に多いのですが、もう一方では、大阪圏も別に負けてはいないということがあります。しかも、伝統的には大阪の市民社会、あるいは関西の市民社会の活動というのはとても活発で全国の動きを先導しているようなケースもございました。それはもう河田先生が、震災等々でよくご承知のとおりだと思います。そういうところというのをもう一度しっかり見直していく必要があるのではないかと。そういう市民の力をただ単に上村委員が、おっしゃったように昔のことではなくて、今のこと、それから将来につながっていく中でどう考えていくのが大事だなというふうに思います。

最近、佐賀県というところでいわゆるCSOの全国組織を呼んでくるみたいなことでやっておられる、80何団体が行ったみたいですけど、そんなことをしなくても関西圏には山ほど国内、そして世界で活躍するNGOというのがたくさんあります。そうしたところの力というのをもう一度関西の力としてきちんと位置づけ直していく、またそれを関西圏域として支え合うようになると、むしろ新しい関西の力が見えてくるし、人の流れというのできてくるのではないかと、そんな風に考えています。もちろん、こうしたNPOやNGOの活動というのは、世界やあるいは日本につながっているだけでは

なくて、これは前の今回の報告に至る展望研究会でも強調されていましたが、関西圏域は確かに都市化も進んでいます、もう一方ではその割には東京圏とは違って、比較的地域コミュニティの力というのがまだまだ残っているところも多い。もちろんどんどんダメにはなっているのですが。結局、地域コミュニティの力というのをやっぱり関西は関西として、それなりの伝統があってその上に今、それを改めて組み立て直そうという動きもあります。こうした動きというのを地域の中だけの動きとしてではなく、広域的にも考え、そして日本全国や世界との関係でも考えていく、そんな視点も大事なかと改めて思いながら、特に人の持っている力、特に市民が持っている力というのをどう考えていったらよいのか、このあたりはフォローアップの際にも重要になってくるのではないかと考えています。

大きな3つめで経済の話がありました。北村先生からありましたようにメガリージョンというのはこれで世界の流れです、恐らく東京メガリージョンは、まだしばらくは持つだろうという風には思っています。ただ、いつまで東京かということもあって、恐らくかなり早い段階で中国海岸部の裾野になっていくのだろうなという感じを個人的にはしているのですが。それはそれとして、この東京メガリージョンというのを考えてみたときにそこで想定されているのは、別に首都圏とか、今言われている東京圏ではなくて、むしろ名古屋圏やあるいは大阪圏・関西圏も含めたメガリージョンというのを想定しそういう定義をするやり方もあります。逆に言うと東京メガリージョンの重要な一角というのを関西で支えているところがあって、そういう位置づけもありかなという風に個人的には思っているところがあります。特に本社機能が東京に集中しているという議論がありましたが、もう一方では新しい事業がどんどん今開業されている地域の一つとしてはこの大阪圏というのは意外に頑張っているというかそういう新しいビジネスチャンスがどんどん生まれているところでもあります。開業率が結構高いところなんです。そういう点では関西の持っているいわば中心ではないけれど、でも逆に言うと中心ではできないことをやれる別の中心というのが経済的な圏域とし

であるのではないか、そしてそういうところのビジネスチャンスというのを多分たくさんの人を、特に新しい企業を興してみたいというチャンスを、巨大な組織ではないところでチャレンジをしようとしている人にとって魅力的な場所になるかどうかというのがとても重要な気がして、このあたりはむしろ広域的にしっかり支えられるのではないかとこのことを考えながら、このメガリージョンの問題というのを克服すべき問題と言うよりは利用すべき問題として考えていくのもありかなという風に思っていました。

大きな4つめで、これは河田先生の話にあったとおりでありますが、こういう人の流れとか環流とか交流とかを考えていくときにどうしても物理的な人の動きというのに注目してしましますが、今これだけの情報社会が行き届いている中で、逆にバーチャルの世界でもしっかりと関西の固有性をもってどう作り上げていくかというのがとても大事だと改めて思っています。こうした関西圏域として、本当にこの関西というのが、少なくともバーチャルなイメージの中で関西の固有の価値というのを示し続けている、あるいはそこにできあがるネットワーク上のコミュニティと言うのがそうした魅力にあふれたコミュニティになっているかどうかということが改めて問われていますし、そうところでこそまさに人の交流が触発されるような気がしています。そういうバーチャルなネットワークというのは恐らくオフサイトミーティングのような形でリアルな世界にも当然直結をしていくだろうという風に思っていますし、そういうリアルとバーチャルのやりとりのようなこともこれからの重要な戦略としても考えていけるのだろうなという風に思いながら、お話を聞いていました。

すみません。最後にします。実は、来年G20が大阪でございます。これに向けて、各国首脳が集まりますので関係ないと言えば関係がないですが、もう一方ではこういうチャンスで世界とつながる、日本国内各地域とつながる、そして様々な分野で議論が進みますから、関西広域が抱える色々な問題というローカルな問題をグローバルな世界に入力し、そして世界の問題を関西に入力するというローカルにおいてグローバ

ルとローカルとが、相互に刺激をしあう可能性があります。そういう機会という風に考えていただくと多分人の流れやあるいはこれからの関西の発展というところの視点も違ってくるのではないかと、そんなことを考えていましたし、それがおそらく2025年の万博、あるいは2030年SDGsみたいな目標とうまくマッチするのかなという風にちょっと思いながら、このあたり戦略的にそれこそ考えていかないといけないかなと思ったので付け加えさせていただきました。すみません、長くなりまして。

○飯尾副座長

ありがとうございました。たくさんメニューを出していただきました。さて、一巡いたしました、いかがでしょうか。このことはもうちょっとお話をしたいとか先ほど言い忘れたというのがあれば。はい。どうぞ。

○木村委員

今の新川先生のお話に関連することが一つと、他に2点ほど申し上げます。1点目ですが、私はよく、一つの都市について4つくらい写真をあわせて1枚のパワポにして、「はい。これは世界のどの街でしょう」と授業で聞きます。ニューヨークとかロンドンとかパリについては、学生は当てます。都市や地域のブランドイメージというのは大事だと思うのですが、大阪とか大阪だけじゃなくて関西で4つくらいの写真を組み合わせたら、関西と分かるぐらいのイメージを造り上げなければいけないのではないかと思います。私たちはある風景写真を見れば、すぐにこれはブルターニュだとわかる写真があります。2点目は、観光の話をする、それしかないのかという議論が必ず起きてくるのですが、観光は有力なものですが、将来の産業は観光だけではないとすることは確かです。例えば、私は松原先生と一緒に和歌山県の出身で、本当に和歌山県の人口が減ることは残念だと思っています。愛する和歌山について、数年前に非常に感じたことがありました。どういうことかと言いますと、色々なプレゼントを人に差し上げる時には、できるだけ故郷の和歌山から送ることにして、歳末には、ミカンを送ることになっています。そしたら、受け取った方々から「ミカンがこん

なに美味しいとは知りませんでした」とか、すごく賛美の言葉をいただきました。私は数年間、それに満足していたのですが、数年経ってからちょっとおかしいなと思いだしたのですね。なぜかと言うと、私が送らないと和歌山のミカンがこんなに美味しいとは東京の人は知ってくれないのか、名古屋の人は知ってくれないのか。関西の人の交流・環流も大事ですが、関西から物を外に出すときにも、もう一回考え直さないといけないものがあるのではないかと。それを一つずつきちんとしていたら、経済の底上げみたいにつながるのではないかと思います。それはやはり中には分からなくて、外からの目とかというのが必要なのではないかなと非常に感じたところです。

最後ですけど、観光立国の特徴の一つですが、皆様、イタリアの小さな村とかいう番組でご存じだと思うのですが、イタリアでもフランスでもある時までは、農村は荒れるに任せていたが、ある時点でこれではいけないと言うので、端正な暮らし方、ふるさとを愛する暮らし方というのに変わっています。観光に力を入れると、人を呼ぶことに重点が置かれすぎて、故郷に対する愛着が二の次になるのではないかという懸念を表明する人もいますが、私はかえって逆ではないか、故郷を愛する端正な暮らしが人を引きつけるのではないかという個人的にはそういう風な気がしています。以上です。

○飯尾副座長

ありがとうございます。どうぞ

○上村委員

先ほど、新川先生の4番目ぐらいのところで、関西は結構新しいベンチャーが産みやすい土壌で今生まれているというお話なんですけど、反面ですね、関西は、本物を見極める目がありすぎて、なかなかベンチャーが育たないですね。厳しいですよ、やっぱり。若くて元気でまだ、荒削りでアイディアだけだというようなものを関西はあまり許さないですね。むしろ東京の方がそういうような人をみんなでもって押し上げて、世に出していくという感じを持ちます。関西人は目が本物を見分けたり、損得に対し

ての感覚がやっぱり非常に鋭いですから、いい加減なことのフラッシュアイデアで元気だけというのはなかなか出られないという感じを聞くことがありますし、私自身もベンチャーの審査委員をやっていても他の先生方みんな厳しいです。ところが、同じ人が東京に出てアイデアのフラッシュアイデアモデルを横展開したら結構全国的に流行っていったりというのがあって、後で結構あの人だったねと思うことが多いのですが。是非ベンチャーを応援する機関もあるので、もう少し長い目で見たり、ちょっと大目に見たりというようなマインドがやっぱり関西人には必要かなというように感じましたので付け加えます。

○飯尾副座長

それはちょっと外の目を入れて発想を変えないと関西人はちょっと真剣すぎるというかそんな感じですかね。

○上村委員

損得がきついんです。

○飯尾副座長

それは良いこともあるのですよね。

○上村委員

関西人は損は嫌いなんですよね。損するかもしれないことに対しては直感で危なかしいと思うのじゃないですかね。

○新川委員

統計的にもこれは大阪だけですけど、新規に開業されて5年間の事業の継続の比率がやっぱり全国に比較しても高いということがあります。そういう点では目利きがよく効いているという点では、あるかもしれませんが、本当に世界に将来打って出るようなベンチャーができていないかと言えばちょっとよくわからないところがあります。

○木村委員

外国人が増え、また異業種が増えてくると、慣習とか文化などと軋轢を生むよう

な事態が生じた時に、どれほどそれを受け入れる寛容さを持つかと言うことが今後問われることになると思います。

○飯尾副座長

こうした点は、先ほどから出ていたのですが、文化の共存とか寛容さというのは一方では多文化共生の先進地と言っているのですが、他方では日本人には厳しいのですかね。この部分が面白いところなのですが、これいかがですか。

○北村委員

大阪と京都、神戸は違いますから、新しい事業等の受け入れ方もやや異なります。それは関西が全てひとくくりにすることはあまり意味がないように思います。例えば近江商人というのが、近江に本家を置いて京都や大阪や江戸の3都だけでなく、東北や北関東で活躍する商人類型ですが、近江商人の本家に膨大な出世証文が残っています。出生払い、いわゆる出世したら金を返せばよいというのが出世証文で、その出生証文が膨大に出てくるのですね。近世のベンチャービジネスへの貸し倒れ証文が他の地域にはないほど膨大に残っているということは、近世の近江ではベンチャービジネスに対して非常に寛容であったということです。関西は、それぞれかなりの地域個性を持っているのです。多文化共生というのはそういうものであって、関西は一つの地域なんだけど、それぞれの地域が個性を持って展開しているということであり、グローバル化時代にその強みをどう活かすかが問われているのだと思うのです。

○飯尾副座長

関西は中に異質な物を抱えているから、反ってまた魅力があるということですね。上村先生に落とされた人はちょっと滋賀県の方にお金を貸してもらった方が良いかもしれませんが、ただ、そういう情報の共有ということもあるともっと伸びるとか、助け合い、自分ところではできないのだけど、あっちに行けば、良いよと言う話でもありまじょうかね。

さて、論点は色々出てきましたが、

## ○北村委員

先ほど、上村委員が前におっしゃった人の環流における交流と移住・定住とは少し分けた方が良いでしょう、両者が関連しているのではないかというのは非常に重要な論点です。人の交流、移住・定住と言ったときに色々なものがネットワークで見るときに圏域を超えたネットワークを作るといった問題があるということと、もう一つは移住・定住という問題を何となく田園回帰とか古民家利用とかそういうことで言われているのですが、先ほど山口委員がおっしゃった、人がそこに住むというのは、あるいは、人口が移動するというのは数の問題ではなくて、そこで新しい人生を送り始めるとか生きがいとか、そういった生きがいのある地域、あるいは働きがい地域でないと人が移ってこないのであり、この問題は人口減少を解決する場合に人の数でなくて人生の質が大事だなと私は思っているのです。そういった問題を考えてみますと、若者の田園回帰と言うよりは、むしろ昨年ベストセラーでありました「ライフシフト」という本がありますけれど、あそこで言っているのは人生100年時代の社会づくりなのです。そうするとこれからはセカンドライフをどういう風に設計するのか。それは単に定年退職後というだけでなく、40代ぐらいで退職する若い場合もありますし、セカンドライフをどういう風に送っていくのが大事であって、そのセカンドライフの就労支援みたいなものをより効果的に行うためには、一国レベルでは広すぎるし、都道府県レベルでは狭すぎるし、むしろ関西広域みたいに都市も農村も抱えて、色々な働き方があるところこそ、セカンドライフの就労支援みたいなのが効果的にできるのではないかというように私は最近思っています。移住・定住と言っても生きがいのある働く場がないと難しいわけですね。だいたい移住・定住セミナーと言えば、都道府県別で行われているわけです。そうすると農村部で新しくやる場合もあるし、都市部ではじめ直す場合もあります。私は、滋賀県でNPOの中間支援組織に関わってそこで「おうみ未来塾」という地域人材育成塾を20年やっているのですが、最近増えているのが、例えば、大阪でITベンチャーをやっていた人がもうこの仕事では

子どももうまく育てていけないし、こういう生活は限界があると言って、まず地域おこし協力隊ということで滋賀県に定住をして、それだけでなく未来塾にきて、活動の仕方を学ぶということをやっているのです。地域人材育成塾が、むしろ新しい働き方を求める都市部の人の受け皿になっているのですね。そういうことが今、求められてきていて、それが実際全国レベルではあるし、滋賀県のように県レベルでもずいぶん行われているのですが、関西広域レベルでやってくるともう少し面白い展開、人の交流をしながら、定住・移住の促進をする、そこに働きがいがある就労支援も含めて、やっていけるのではないかなという感じがして。これは、この前私も関わった関西圏域の展望研究会のところで若干欠けていたかなと言う感じがしています。そうした関西レベルによる人の環流というものが、関西広域連合のひとつの政策領域としてあるのではないかと思った次第であります。

#### ○飯尾副座長

これは関西圏域だからこそ、関西圏域は多様だということでしたが、関西の外から人を持ってきてだけでなく中で動かすということによってもっと人生が豊かになるということでもあるし、そこが特性ですよ。都会の人がセカンドライフを田舎の方に行くのもそうだし、田舎の人がセカンドライフを都会でも楽しいですかね。それは分かりませんが、あるいは最初にお話があった河田先生の新幹線でいうのは平日東京で働いてわざわざ移住をせずにちゃんと週末関西に帰ってくるのですから、関西で住んでいる魅力があるのでしょう。あるいは、東京で今ずっと週末を含めて全日を過ごしている人が二箇所居住で休みの日だけでも関西に住んでくれれば、よろしいかもしれませんし、ちょっとこれ人の移住・環流というのを言っているのを幅広いことを言っているということですので、その中で言うと関西の強みを活かすということ。仕事も今さっきライフシフトの話がでましたが、一人一つの仕事という時代ではなくなって、どんどん企業も副業を認めましょうという世界になってくると、またそれにあわせておろおろするというのもあるかもしれませんね。

○上村委員

今の話の中で、いろんな人材の層があると思うんですけど、是非、積極的に環流が広がってくれることを思い発言しますが、最近では東京で有名な作詞家や作家、大学の先生が老後は京都でという感じで移住される方が以前より多くなりました。瀬戸内寂聴さんもかなり前においでになった。今も増えています。そういう方々を敷居の高い京都がVIPとして温かくコミュニティーに入れ、もてなしながら迎え入れている。そういうことが流行りつつあるなと思っています。これだけでなく色々な移住の仕方があると思う。先ほど、シンガポールの例を出しましたが、意識的に世界の頭脳だという方を高額を出して招聘したり、アーティストの方々を招くことで世界に知らせることができる。人生100年時代に、シニアだけでなく若い人を含めて、移住・定住を考える中で層として考え直しても良いのかなと思いました。

○飯尾副座長

いかがですか。どうぞ。

○新川委員

上村委員の話ともつながっていると思うんですが、単に週末居住としての関西ではなく、もう一つの生活の拠点という意味を持ってくると単なる二重居住ということではなく、関西の楽しみ方、そこでの生き方というのができてくる、という姿を描き出せると、ライフスタイルとしては、どこまでロハスになるかは分かりませんが、暮らしのモデルが出てくるような気がしました。

先ほどの関西の寛容性というお話、北村先生からの地域ごとの特性という話もありますけど、むしろ私自身は関西圏というのは歴史的に色々な人が集まってこれまで2000年ぐらいの間にこういう暮らしを作ってきたということがあります。その中では常に新しい価値にさらされ続けてきている。価値観の違いや相互の間での競争ということがありながらも、それを受け入れてきているということがありますので、確かに商売の街の大阪ではお金という客観的な価値尺度になるが、長屋に住んでいる庶民

がお金だけで動いているかと言えば、決してそうではない、別の文化がある。京都の路地でも街中でも同じです。多様な文化や価値が重なっていることが当たり前であるということを強みに、それをどのように活かせるかと言うことが大事です。それはすでに農村で試しておられるのですが、例えば半農半Xのような生き方とおっしゃる方もいらっしゃいます。要するに日々の暮らしの中でマーケットに依存しないといけなところもあるが、それはそれとして、残りは健康的で自分自身で心身に良い暮らし方をしましよと、そういう生き方を許容できる地域の経済特性、社会特性、文化特性、自然特性に魅力を見つけることが人の環流に繋がると考えられると思います。

○飯尾副座長

どうぞ。

○河田委員

私は大阪生まれで京都大学をでた後、京都大学の教授になった。京都というのは他府県の間人に対しては排他的である。こういう文化は変わらない、むしろそれをどう活かすか。東京から有名な人がくるというのは、表層的に動いているので、大阪あるいは京都、神戸、それぞれ固有の文化的な要素を持っていて、それは比較して良い悪いではなく、そういうモノをベースにして、そこで生活するメリットが必要。例えば今は情報時代であるから、京都の山奥に住んでいても、東京の都心に住んでいるのと同じ情報がリアルタイムに得られるとか、あるいは移動するのに高速道路と高速鉄道で素早く動けるとか。つまり社会インフラの整備が伴わないといけない。大阪の経済が悪いのは、道路が悪い。中央環状線や内環状、外環状も環状道路になっていない。万博の頃からそのまま。東京はどんどん良くなっている。関西が地盤沈下しているのは、社会インフラの整備で遅れていること、これが一番経済活動に影響している。ですから大阪港と神戸港を比較したときに、神戸港の方が先にグローバル化したのは、神戸の近くに名神高速道路が通っているからであり、大阪港から名神高速道路までは離れていた。固有の文化的な要素は変わらないという前提で、だけど、なぜ魅力かと

いうと今の社会で生きていくための便利なモノが整っている。そういう2重構造にしておかないと。京都の人が大阪の人を受け入れるなんてことはありえない。それは京都大学の先生を大阪や兵庫、京都と同じようにうまく使っているかということ、京都府が一番使えていない。京都府は京都大学の先生をうまく使えていない。私が防災研の所長の時に、人文科学研究所の国内シンポジウムを京都でやったことがない。京都というところは、表向きはともかく京都大学に人文科学研究所があることをうまく利用していない。このようなことが起きている。防災なら京都大学に防災研究所があるから大阪にも兵庫にも行くけれども、京都というところは全部自分のところだけで何とかしようとしているけど京都大学をうまく使いこなせていない。これは東京大学と違うところ。関西には京都大学、大阪大学、神戸大学や関関同立など大学があるけど、近畿圏でうまく使いこなしているところはなく、縦割りになっている。暗黙の内に大学に棲み分けのようなものがある。大阪府立大学と大阪市立大学が合併しても帳簿上の効果はあっても、文化が違うから、学術資源が使うという流れができていないから効果がない。ここが東京と違うところ。ここはたくさん大学があるのにそれを近畿全体でうまく使うという発想がない。関西広域連合ができたからそれぞれから出てきているのであって、過去からの流れでやっていると思う。資源の使い方が中途半端になっているところがまずいと思っている。文化的なところをニュートラルにすることは不可能なので、それはそれで魅力として置いておいて、その上にどれをかぶせておくのかということをやらないと。京都の人に大阪を好意的に見ろというのは無理であり、それが文化である。それを前提に交流できるようなシステムを作っていく。文化と文明をまぜてはいけない。文化は文化で置いておいて、文明のところでもうまくいく仕組みづくりを考える必要があると思いますが。

○飯尾副座長

どうぞ

○木村委員

北村先生がおっしゃっていた100年人生を支えるための対応策・対策を関西で作りあげようというご意見に私も賛成です。和歌山の私の生まれた街は商店街がさびれた感じなのですが、昔はどうかなと思っていたことで、今は本当に効果があることがわかったことがあります。それは、60代の人が1人でも数人でもコミュニティに新たに入ってきてくれると街に活気がでたと言っています。また、100年人生を支えるために一番必要なのは医療・福祉の整備が欠かせないことです。

○飯尾副座長

どうぞ。

○松原委員

皆さんの話聞き惚れてしまいます。和歌山の場合、近畿の中にどのようにつながりをもつか、仲間に入れてもらうかという発想で考えていますが、新川先生の話の中でリアルとバーチャルのやりとりによって、そこに関西の固有性の形を作っていけるというお話は興味深かったです。

どうやって人の好奇心をかきたてるのか。例えば、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、その時代の中で和歌山県北部紀ノ川流域から行く、飛鳥から奈良、(滋賀)に行くという歴史上の文化圏の中で、どんな風につながっていたのか、人の流れがどんな風になっていたのか、また、奈良と堺あたりの人の流れとか文化の流れが、どんな風につながっていたのか、今に残る文化遺産のリアルとバーチャルによって、好奇心を刺激していくのがおもしろいなと思いました。

この前テレビを見ていると、提言(関西圏域の展望研究報告書)にもあるジオパークについて、大陸から日本列島が切り離されて、プレート同士がぶつかって、カルデラ噴火が和歌山の南部で起きて、その火山活動の結果生じたリアルとしてジオパークとして残っているとすると、それをバーチャルで想像力をかき立てて今のジオパークを眺めてみたいという仕掛けを作るというのもおもしろいかもしれません。

あるいは空海がどういう動きをし、文化を生み出してきたか、活躍してきたのか

ということもリアルとバーチャルのやりとりによって興味をかき立てていけないかとは

関西のフィールドの中でなら色々な時代の色々なことが考えられると思います。

○飯尾副座長

山口委員、いかがですか。

○山口委員

12月に東近江で行ったイベントで、東近江市も1市6町が合併してできたそれぞれ違う文化圏でできた街である。時代で切ると、密接に隣町と関わっていることがわかる。そのおもしろさを体験していただくということで、フィールドワークとしてツアーを8コース設けました。古墳時代から時代で切っていくということをやって実際、市の職員や東近江の人知らないことがいっぱいあったり、圏外の人からものすごくおもしろいと評価をいただいたことを思い出していた。

そういう意味では、関西の面白さというのは外国人にはたまらないと思うし、圏外の人にもうらやましくて仕方ないはず。そこをどのように見せるか。なおかつ過去のことを知ることが愛着を生むことに一番手っ取り早く、高校生が「ここに住んでいることがすごいこと」と言っている。これはすごく大事な事。

過去の掘り起こしや地域の広がりというのは、是非チャレンジしてみたいと思いました。

○飯尾副座長

どうぞ。

○河田委員

市町村の合併で市町村の数は減ったが、消防団の数は減っていない。つまり3つの町が一緒になっても3つある消防団を1つにできない。なぜかというと、それぞれの消防団は文化を持っている。そういう状態で消防団を放置しているからどんどん高齢化が進んで、団員も少なくなり非常に困っている。というのは消防団で活躍してい

る方は町で色々なことをやってくれている人なんです。東日本大震災の復興で困っているのは、消防団員254名が亡くなったことにより、町のことを考えて動いてくれる人たちがいなくなりました。そんなことで復興できるのか。過去のことを放っておくとダメになっていくので、そこをどのように強化するのか、なんです。行政はそこまで考えていない。むしろ、人を減らすとか、アウトソーシングするとか、そのような行財政改革をやる。方向がチグハグになっている。ですから町が大事といいながら、そういう人たちが前よりも活躍できなくなっている。その特効薬がないから、結局そのトレンドが続いている。そうすると、地域防災力がどんどん落ちている。常備消防もできるのかというできない状況。ところが今、常備消防は消防団が来ると消火より交通整理をさせている。実態がそうになってきている。地域にとって大事なモノをどのように育てるかということ考えておかないと、良いモノは目につくが、ネガティブになっていくモノに目を向けないと、地域全体の体力が落ちていく。それを強調せず仕方がないですませられない問題。ですから防災の問題は自助共助が大切だと言いながら、実態は地域の防災力が落ちている。そこに気付かなきゃいけないと思います。

#### ○飯尾副座長

だんだん盛り上がってきまして、関西人はみんな知っているのだけれど、日頃は口に出さないことを口に出されてみたり、意外なことが出てきたりしております。これから話すともっとおもしろくなりそうですが、そろそろ時間でございます。私がまとめなければいけないのですが、まとめる程の時間ありません。

ただ今日色々出てきて、最初から出てきた人の環流と言うけれど、まず実態をもう少し丁寧に調べないと、住民票でこうだと言っても済まず、人が行き来するとはどうということかということです。今、移住、定住、交流、観光、おそらくそれぞれ意見が出ましたが、観光もただ観光客が来るだけではない。その後、好きになってくるとか、仕事になってくるとかの関係が生まれてくる。そういうこともある。移住といっ

でも移りっぱなしではなく、あちこちウロウロするとか、人生の経路に応じてやっていくという風なことで、その人の環流のイメージを豊かにしなければならない。人が減って困るから引き留める、呼んでくるということではないということになってきたと思います

その中でいうと、関西は多様であるから、これを活かさないといけない。関西でまとまったら、平均値をとって、関西はこれですという強さがなくなるので、良い面、悪い面を、それぞれ文化的なことと文明的なこともあるし、助け合うためには、何をすればよいかということを経験的にしないといけないという問題があります。ところが、放っておくと情報の共有もないので、知らないままにあそこはああだろうとか、自分のところだけでだめだと思ったりすることがある。関西広域圏で助け合うことの中には文化的な多様性ということもあるので、外国人を含め、あるいは多様性という点では、若者や高齢者イメージも変わってくるかもしれない。人生長くなってくると。元気なのは若者だけではなく、元気な老人でエネルギーの余ってる人をどうするのとか。そういう様々な活用法がある。その中ではトップレベルの人を無理矢理引っ張ってきて何かするということもあるだろうし、こちらでお金が借りられない人に次で貸してあげるということもあるかもしれない。くたびれたから、週末は違う地域に泊まりに行くということかもしれません。

そういう点からいうと、最初に河田先生から出ましたが、発想の転換が必要です。この類の政策は、よくあるのは他所でやっているものをそのままもってきて、そのままやるので次のイノベーションがありませんので、少し境目を外して人の環流とはこういうことだという思い込みをなくして実行する。あるいは最後の方に出てきたように、人の環流が何かと考えれば人数だけではない、小さな村であれば一人来れば、大違いになる。大都会であれど違う種類の人があると意外な結びつきが生まれてくる。

大阪に損得勘定の薄い人が来て、カモになるだけではないので、そういうことも含めて、そういう人は助けてあげるとか、行政の役割、行政といっても府県、国、

あるいは関西広域連合、民間企業がやっていること、あるいはNPO、市民、消防団にいたるまで、それぞれで整理して、メニューをたくさん作っていく。松原委員が具体的なご提案が出ましたが、フォトコンテストまでいきなり行くかどうか別にして、それも含めて、あるということかもしれません。

また、関西の良さというのは、自分で思っている良さが良さだけでもない。外の目から見たら意外なことが良いと思ってもらうことがあり、関西人が良いと思っているところが障害になって、人が来ないとか、起業ができないということがあるかもしれません。そういう交流も含めて人の環流だと考えて、議論していただきたいと思っています。

皆さんご熱心で、時間不足の感じがありますが、これはこれで終わりではありませんので、今度、本委員会があつて、そこでも議論ができるようにと考えています。おそらく今日宿題を出しているので、次回までに事務局から府県市とも相談したおもしろいたたき台が出てくることを期待しています。

本日はどうもありがとうございました。